

「一億総不安社会」を生きる！ （加藤和保）

[おすすめしたい本：姜尚中『悩む力』]

親の介護、家族の病気、自分の老後……。仲間が集うと堰を切ったように悩みが噴出する。皆、不安なのだ。平凡な日常の暮らしやささやかな貯えさえ一瞬に消失する事を、リーマンショックや3.11で体験したから。この不安や悩みから解放される術はあるだろうか。高齢で自分の身一つでさえ不安な私たちは、明日の身を憂い惧れている。

こんな悩みに対し、本書で姜氏は「死や不幸、悲しみや苦痛から目をそらさず、悩み抜いて生きよ」と主張する。「中途半端ではなく確信が出来るまで悩め」と。意外だった。楽観的な幸福論を期待して、手に取ったからだ。だが氏の主張は、自らの体験によるものだけに説得力があった。

在日である氏は明けても暮れても自分の存在と将来に悩み、孤独感、絶望感からストレスで吃音になったという。冷静で知的な優れた学者の彼をしても、悩みと無縁ではなく苦悩の日々を過ごしたのだ。何だか救われた気持ちになった。

真摯に悩み抜いた氏はどう克服したか。それは「他者との繋がりを求め続ける」生き方だった。幸せな人生を送るには相手を認めて共に生きるしかない、これが氏の結論だ。

もはや経済的にも社会的にも、私たちは孤立したままで幸せになることは出来ない。いずれ誰かの支えが不可欠になる。だからできる限りモラルを維持し（老人特有の独善や自己チューを押さえ）、相互理解の関係を築くことだ。ありきたりだが、分別のある老人になることが幸福への道なのだ。誠実に悩みながらも他者への配慮を忘れない、それは引きこもりや就活に悩む若者へのエールでもあろう。

「一億総不安社会」に向け、豊富な資料と体験に基づいて書かれた本書。姜氏の優しい眼差しと歯切れのよい文章が魅力の一冊だ。若者にもぜひ勧めたい。読後に「続 悩む力」も読んでみようかと思うのは、きっと私だけではあるまい。